

特 253

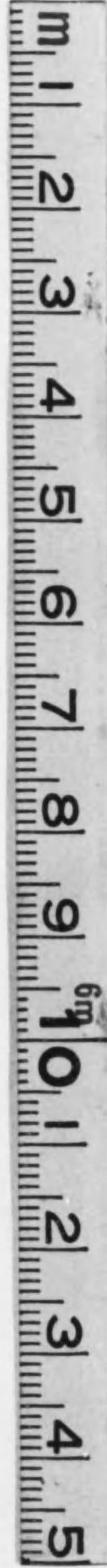
641

小吉藏編著

木下尚江翁語錄

附 其研究

第一卷



始



39
2

特253
641

序

編者問、吾等は無始以來造つた罪深いから、

坐る？。

翁答、然り、木下尙江には是以上のことは

是の信仰であつて。本書の活骨髄である。

昭和十四年四月



於三箭堂

青木吉藏

發行所寄贈本

凡例

- 一 本書は木下翁の垂示（大正九年より昭和十二年、即、翁の歿年まで十八年間の、主として自昭和四年至同十二年）である。わが備忘の爲に記したものである。
- 一 本篇と既刊『尺牘』とは、姉妹篇であつて。翁の筆（尺牘）と、舌（本語録）とに依つて、その全貌は描寫せられるのである。
- 一 尺牘の反響
静坐子の現狀
世相
より受けた衝撃は、本書刊行の動機となつたのである。
- 一 本書を上梓するに當つて、翁の眞意を誤解して讀者に傳へはしないか、を自分は懼れた。けれども、斯した弊害は避難い事であつて、翁の言葉を藉りて言へば『岡田先生の語録をNが編纂したらNの語録となり、青木が編輯したら青木の語録となる』のであつて。是の如く我は聞いたのである。従つて、本書は『木下尙江翁語録』と題してあるが、その内容は『青木吉藏語録』である。
- 一 『後記』を添へて、本書成立の徑路を明にした。
- 一 本語録は逐次發行の心算である。

昭和十四年四月

編者

目次

大正九年六月三十日 一
大正九年十月二十五日 六
附録、語録研究 九
後記 四

大正九年六月三十日

1、言葉、聞く人によつて違ふ。

2、本を読んだ人は、反動で、讀まない方がよいと言ひ。讀まない人は、讀めば、自分の今迄の無教育が分るから、讀むとよいと言ふ。共に病だ。

3、新聞でも得る處ある。新聞を讀まないとき勢に後るとて、朝、顔も洗はないで讀めば、新聞に讀まれる。

4、歴史に残る人には、吾々の経験しないものがある。

5、岸本能武太君でも、凡、學校の先生は、靜坐を教へるから不可。



6、小林參三郎さんはよい、よいもの持つて居る。御同行といふ風だから。小林さんでは、靜坐について面白い話があるんだ。

7、人間の身体は巧妙に出来てあると見えて、姿勢一分一厘違つても不可。

8、岡田先生は、腰を立てることは厳しく言はれる。

9、岡田先生は、呼吸法になつては駄目、呼吸が變らねば、と言はれる。何處に吸ふ等と、考へると不可。六七分吐けば、後は自然に吸ふ。

10、(編者問、胸、肩に力入らない限、腹に力入れてもよろしいですか。)よし。

11、腹に力入れてをれば、だん／＼、或一点に集まるやうになる。

12、(編者問、身体が悪くても、智能は啓發されますか。)されない。

13、西田天香さんには、十年も逢はぬ。人の十年は百年。

14、天香さんは、よいものを持つてをる。

15、天香さんは慾深い。何でも、老莊、禪、天理教其他財布に入れる。天香さんは、財より出たから。

16、僕、一燈園知らない。

17、天香さん、才あり過ぎる。

(註、才の話は度々あつた。)

四

18、(编者曰、天香さんは、一燈園機關雜誌『光』の發行、其他、凡、自分の發意ではなく、自然にさうなつて行つたのだと言はれる。)
自然じやないだらう、口開いたのだらう。

19、天香さんは、社會的に廣つて行かれる。

(註、こと、翁非難)

自然に流れるのはいい、琵琶湖の水が溢れるやうに。

20、天香さん、早過た。六十位になつて、圓熟してから言へば。
天香さんに言傳して下さい。

21、鑛山を掘ることは、臟腑を扶られるやうである。

私は金に縁がないが、貴下等は考へませぬか。

(註、これは天香さんが、鑛山に關係して居られることを非難されたのである。)

22、職業は選んだといふよりは、二三分は選ぶが、他は縁。
やるのもよろしいが、他の人まで引入れるのは不可。

(註、これは天香さんが、一燈園生活を他人に勧誘されることを非難されたのである。)

23、田中正造翁、早く死んだ。

24、種が善くても、畑が善くないと不可。

25、僕、天理教へ行つた。

某高利貸が強慾非道にて造つた金を、懺悔して、天理教へ上げたといふことを聞いた。

五

信者より上げた金を獨立運動に澤山使つた。考へものだ。

26、京都は遊ぶには好い。十日位。

京都、奈良は公園。

僕みた様な關東者は、住む氣にはなれないが。

大正九年十月二十五日

27、岡田さんは世話されるか。(註、靜坐御指導のこと)

御暇乞なされるか。(註、御死去のこと)どちらかである。

28、(編者問、岡田先生御死去後は、吾等是如何にすればよろしいか。) どうもないではないか。

29、一燈園の奉仕には、高慢がある。

使ふ人も、使兼ねる。

奉仕、金を貰ふこと豫期しやしないか。

30、西田直治郎君?、天香君に従ふこともできぬ、さうかと言つて反抗もできぬ。

直治郎君?は、天香君が殺したのである。

(註、精神的に)

直治郎君?は三人前も役に立つ男であつた。

附錄
語錄
研究

語録研究附言

本文は語録を拜讀して得た感想記録である
他に向つて説くべきものではなく、愚昧な自分
への箴誡である。

2、本を読んだ人は、反動で、讀まない方がよいと云ひ。讀まない人は、讀めば、自分の今迄の無教育が分るから、讀むとよいと云ふ。共に病だ。

新聞でも得る處ある。新聞を讀まないと時勢に後るとて、朝、顔も洗はないで讀めば、新聞に讀まれる。

偏することは不可。

極めることは執着である。

本を讀むとは自分を讀むことである。落着いて讀めば自分を讀むことができる。この落着を自分は靜坐によつて得た。

本に讀まれない人が幾人あるであらう？、大抵の人は、自らは讀んだ積で居るけれども、讀まれて居るのだ。

殊に、現代の書籍、雜誌、新聞には、ホントのことは書いてないのであるから。

3、歴史に残る人には、吾々の經驗しないものがある。

讀書の目的はこゝに存する。

4、橋本先生は、靜坐に小才を出すから、岡田先生困つて居られる。

橋本氏は『幸か不幸か、同じ先生の門より出ても、銘々、多少其工夫を異にするものあることは免れません。私は先生の教を基礎とし、自分の体験に依りて、多少の工夫を重ね。全氏著、續靜坐の力』と述べてをる。橋本氏に教を受けた靜坐者は此点に氣附いて居るであらうか？。

5、岸本能武太君でも、凡、學校の先生は靜坐を教へるから不可。

求道者が嚴に自戒しなければならぬことは、驕慢である。これが爲に進歩止る。

山へ登るのに、振返つて後進を磨く時は、わが足は地に膠著する。往相、還相といふが、往相の中に還相はあるのだ。

岡田、木下兩先生は、此点を嚴戒せられた。『易に曰く、道は滿盈を忌むとかや、何卒、生涯生徒たるの御覺悟あらん事、專念奉希望候』（岡田先生より門人への書簡。）

『大先生になつちやお仕舞だ。何時でも生徒でなければ』（岡田先生御直話。）

『參坐學生で、面白い人があつたが、途中で、人を導かうとしたから駄目だつた』（岡田先生御直話）

『古來求道者なる者、皆、慢心ありて慚愧なし。戒めても又た戒めざるべからず。木下翁より編者への尺牘』

岡田先生は、希有の大人格者であつたが。その弟子は何れも團栗であるやうである。自分は寡聞にして、木下先生以外には、導師たる資格者を見出し得ない。

靜坐を教へて居る人々は、故人今人を通じて例外なく行詰つてをる。懼るべき事は、應報の觀面なる事である。

岡田先生は、又『學校にて形式的に生徒にやらせても駄目』と、仰せられた。教へても、効果はないのである。

今の靜坐子は形骸を墨守してをる。これを愚直といふのである。

7、人間の身体は巧妙に出來てあると見えて姿勢一分一厘違つても不可

『毫厘の差は、天地の懸隔ですわい。靜坐社發行、岡田虎二郎先生語録』

『姿勢も一分一厘違つても駄目、一厘の差は千里の差。岡田先生御直話』

『髪の毛一本の差が、地獄極樂の境目。靜坐社、先生語録』

とは、怖ろしい言葉である。

『而して此の坐はる姿勢と精神と全く一如で、分厘の差は直に千里の距離を來たす所以を始めて了解することが出來た。木下翁著、野人語第三、』

『然レドモ毫厘モ差有レバ、天地懸カニ隔リ。遠順纜カニ起レバ、紛然トシテ心ヲ失ス。道元著、普勸坐禪儀』

8、岡田先生は腰を立てることは、厳しく言はれる。

『花を活るのに『天地人』等言つて、花計で、自分は屈むで居る』(岡田先生御直話)

『靜坐は大黒柱を眞直にする万力だ。木下翁著、創造、靜坐問答』とは、腰を立てることを指したものである。

『腰拔』といふ言葉がある。身体の腰が抜けてをると、その精神も腰拔となる。心身は不二である。

9、岡田先生は、呼吸法になつては駄目。呼吸が變らねば、と言はれる。

何式等と言ふものは、凡、呼吸法である。呼吸法は健康法である。が、健康を目的とすることは迷で

あつて、眞の健康は得られない。

岡田先生の教は、呼吸法ではなく、吾等の不正な呼吸を正しくするにある。

『動物と人との相違は、呼吸にあり』

『動物の呼吸であれば、色食慾盛になつて、名利を貪る心大なり』(先生御直話)

『日本人の呼吸は、天地開闢以來斯なつてをるから(註、誤つてをること)大に努力する必要がある』。(先生御直話)

『西洋の音楽師が、歌を歌ふ時の呼吸。即、吸ふ息短く、出す時長く。』(先生御直話)

11、腹に力入れてをれば、だん／＼、或一點に集るやうになる。

『一点に精力が集る』(岡田先生御直話)

『一息々に満身の力がこの一点に集る様に』

『全身の心がすつくり抜けて、この一点に力が這入る様に』(靜坐社、岡田先生語録)
是は修養の根本義である。

『念佛』とは是だ。

一点とは、丹田であつて、『一点に集る』とは、わが身体の重心が安定したことである。精神と肉体とは一如であるからわが身体に、中心が定まると、『吾は宇宙の中心である』との大自覚とは不離の関係にある。

求道者の究竟目的究明の鍵は、此處にある。此境界は、想像も、及ばない言説もできない。

12、 身體が悪くては、智能は啓發されない。

心と身とは一である。所有修養方法は抽象的であるが、靜坐は具体的である。

14、 天香さんはよいものを持つてをる。

天香観が、木下翁と、編者と符節を合すが如くであることは愉快である。

天香さんは凡人の窺知を許さない世界を持つてをる。

さんの反對者は、さん以下の輩で、不食嫌である。

天香さんは、人間性を遺憾なく具有してをる。

さんは、光明を祈願してをる。さんの念願（懺悔、謙遜、無爲、無所有、無我、平和）は正しいもの

であつて標的は外れてゐない。

けれども、さんの生活は、無愧、高慢、人爲的、強慾、我執、霸道であつて、醜惡、そのものである

さんの言行不一致即、生活の矛盾撞着は、此處から發足してをるのである。

さんの生活は、人間研究の絶好資料である。さんの中に、吾姿を見る、さんは吾だ。さんの研究は吾の研究である。

15、 天香さんは慾深い。何でも、老莊、禪、天理教其他財布に入れる。

天香さんは『財』より出たから。

天香さんは何でも取込むが、自分のものになつてゐない。

老莊の中心思想は、無爲であるが、さんの生活は有爲である。

さんは曾、參禪した。けれども、良師を得なかつたが爲であるか、さんの禪は痴禪であることは、さんが執着の強い人であることによつて、證明できる。

天香さんは、無所有を標榜してをる。けれども、京都山科の光泉林には莫大な富を有してをる。

無慾者へは、財は集まらない。ヤソ曰『求めよ與へられん』、さんは金を求めたから與へられたのだ。

ヤソ曰『しみくひ錆くさり盗うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ。しみくい錆くさり盗穿て竊ざる所の天に財を蓄ふべし。蓋なんちらの財の在ところに心も亦ある可れば也』さんの心は地財にあるのだ。

さんの強慾の因は何れにある？

さんの出身地は江州商人の一中心地、琵琶湖北の長濱である。さんは元商人である。商人の生命は金だ。さんはその新生涯の後も財より脱却し得られないのである。さんにとつて財は業病である。自分は業の深さに戦慄する。

わが天香批判は、わが懺悔である。自分もさんとその郷里を同じくする。自分も商人である。

天香さんは現代人と等しく、黄金に眼が眩むでるのであるが。金を慾するさんは、大慾のやうで、無慾である。

自分は金位を得て、それで満足することはできない。モット／＼大きなものを得なければ。人間は左様なけちな者ではないのである。

自分が地上の富を否定する所以は、この小慾が大慾の發現を妨げるからである。

岡田先生は『萬物皆我心の註脚に過ぎない』（語録）『萬有、皆、己の有となる』（御直話）

木下翁は『世界が芥程に見えて來なくつちや駄目』（語録）

『先づ以て有難いことだ。これまで長い間大袈裟なものとして恐れて居た世界などが、鼻の頭に小さく萎んでしまった。』（翁著、創造）

『人こそ眞の大宇宙で、宇宙は我の影に過ぎぬ。此の無藝大食の卑吝な野郎も、よく／＼見れば、神様の掌に大の字形になつて臥て居るんだから有難い』（創造）

自分は、末だ、岡田、木下両先生の如き心境を證得しないけれども此境に近づきつゝあることは有難いことである。

静坐前の自分は、金が慾しくて堪へられなかつた。金持に頭が上らなかつた。

金で買へると、思つてをつたのだ。

自分は病氣の際、（後記参照）

金力に依つてわが病苦が除かれるならば、全財産を投じても構はない。（他と比較しての事ではない）それが爲に、明日から食へなくなつて死んでも悔いなし、と思つた。けれども、それは叶はなかつた自分は、金力に深い疑問を持つた。

自分は『静坐』に入つて、金で買へない世界を發見した。

従つて、物の見方が變つた。自分は黄金万能宗を捨てた。金力を過信しなくなつた。貨幣の價値を、ありのままに見る様になつた。

人を金で評價しなくなつた。貧富的差別観念は消滅した。

黄金重視と共に、黄金輕視も亦病である。重視も輕視も等しく、人間輕視である。

金は、人が使用する爲に造つたものである。金はわが使用人である。

今は、その位置が顛倒した。

人間が企てて然も、果さなかつた世界征服を、金は成し遂げた。金は專制王となり、人間はその奴隷となつてしまつた。黄金万能宗は、人類教となつてしまつた。

吾等は、その位置を取返さねばならない。我が主人とならねばならぬ。

人間は食べたらず、それで、わが營養になるものと妄想して、無暗に詰込むでをる。人間が金を慾するのは、慾望の爲の慾望であつて、果しなき欲求である。

營養は食物そのものに固有するものではなく、食物は消化されて初めて、わが營養となるのである。

營養は、食物にあるのではなく、わが胃袋にあるといふ根本要件を彼等は忘れてをる。

吾等は、わが胃腑の力が弱く、金といふ滋養物に食傷してをるのだ。

金が横暴なのではなく、吾が弱いのだ。金には罪がない、罪は吾にある。わが無知にある。吾等は、

金をわが肥料とする程の大樹とならねばならない。金はわが成長に役立たせねばならない。

持たない者も、持つた者も、金に惱まされてをる。

持つた者も、金を使ひこなすことが出来ないで、金に使はれてをる。金は、その所有主を幸福にしてはをらない。

金を使ふことは、むづかしいことであるが。金の要らない人、即、金で買へない世界の住人にして、初めて、金を使ひこなすことができるのである。

金とは、畢竟、物と、人とである。黄金万能宗は、他力宗である。物質の力と、兄弟の力とを借用して生きる方法である。黄金万能宗信者は、物と兄弟とに支へられて辛じて歩む病人である。

黄金万能宗は腰の抜けた病人の歩む道だ。獨立人の歩む道ではない。

現代人はこの頼みにならない金を便りにして生存してをるのだ。

天香さんは『無一物中無盡藏』を説き、その目的は自分と一であるが。さんは『一度死ぬ』と、強て慾望の根源である。『我』を捨てやうとする。さんはその方法を誤つてをるのである。

天香教のみではなく、すべての教は斯うしたものである。

何故に、金を慾する？。わが心が貧しいからである。故に、無慾を祈願しても、わが内が空虚であるならば。必然に心外の富を追ふやうになる。さんが金を捨てやうとしても、捨て得られないその矛盾生活が、是理を立證してをる。貧乏人に、その僅の持物まで捨てさせやうとすることは、無慈悲である。

偽善者よ、先づ、大きな物を與へよ。めくされ金には眼をくれなくなる。

偽善者よ、先に、わが足を丈夫にせよ、金のつゞばりは要しなくなる。

岡田先生は『名聞利達を心外に求めてはならぬ』と、戒められた。

吾等は、無盡の藏を、吾心内に求めるのである。

良寛和尚、田中正道翁、岡田先生、木下翁等が、無一物に甘んじて居つたのは、天財を擱んで居つたからである。

わが内に無限の富を所有する者は、さん及現代人の如く、心外に富を求めるの要はないのである。福はわが内に在る。然るに、無知の鬼は是を心外に求めてをるのである。

17、 天香さん、才あり過ぎる。

才（とは智識である）は天香さんの長所で、亦、短所である。

さんが今の様に、大事業家と成り、従つて、有名になつたのは、その才智の賜である。

さんの人格の大成を阻害してをるものは、實に、その『才』である。

さんの如き多才の士は、その才能に依つて、有爲の生活を爲し、地上の成功者となることはできるが、無爲の樂を得ることはできない。

さんの様な 才、金、名譽と、三拍子（三條件中、才が元で、さんは才によつて金と名とを得たのだ。）揃つて欠けたものがない、浮世の成功者は不幸である。法道には、無縁の衆生である。

娑婆界の失敗者でなければ、佛道へは入れない。

『私の方では自殺しなければならぬと決心した位の人でなければ面白くない。そんな人を素質の好いと云ひます』（岡田先生語録）

さんは無爲を願望してをる。けれども、その才が阻止して、無爲界への飛躍を許さないのである。才を捨てる事を拒むものは才である。さんは才を捨てないから、無爲界に入れないのである。

人間は元始時代には、エデンの樂園に住んで、生命の樹果（とは絶對智である）を食つて居た。

アダムとエバは、神の禁制を犯して、善惡を知るの樹果（とは、相對的、比較的なる吾等の智識であ

る)を食つて、樂園から逐出された。吾等の罪の淵源はかやうに遠い。智識は、止處なく、發展して行つて遂に今日の如き、智識万能時代を現出した。吾等は罪を重ねて來た。

人間は文化を誇る。けれども今日の行詰を否定することはできないで、救済を絶叫してをる。

現代人は、智識万能症を救治するのに、同じ智識を投藥してをる。

自分の知人に投機で失敗して、その回復策に苦心の末『壁の落ちたのは土でなければ繕へない』といふ眞理を發見した、とて再び、大投機を試みたが結局失敗に終り遂に破産してしまつた男がある。現代人は、この人を嘲笑する資格はない。

現代人は、火を消すのに水を以てせず、油を注いでをる痴人である。

智識は従僕である。僕が我家を占領して、のさばつてをるのである。僕の爲に、主人が幽閉されてをる。これが吾等の現状である。

主人の不在な家庭が、亂れて治まらないのは、當然である。

僕は力があるから活動する。けれども、盲目だ。盲目であるから、軌道を歩かない。

人生の苦惱は、すべて、此處より發生してをる。

智識は、下部である。その上に『或物』が坐さねばならない。或物とは『智慧』と名付けてをるものである。是が、眞實の主人公である。求道者の探求してをるものは是だ。

絶對の体得者岡田先生は

『あゝ宇宙の萬象も仔細に其基因する所を探求すれば、悉く靈妙不可思議なる實在の發展に在るを思へば、科學萬能主義を以て能事了はれりとなす本邦教育が邦人の道義心を萎微頹廢せしむるは理の當然なりと小兄は斷言するに躊躇せざるなり』

『科學には結論なし。科學のみを以て人生の窮極を解釋せんとするは、樹に據て魚を求むるの類である。』

科學は學ぶべきだが、科學に囚はれた學者は人生研究の落第者である。』

『比較を離れよ』(とは、相對的なる人間の智識を捨てよ、である)

『比較してはいけない。競争心を起してはいけない』(智識、即、小我が自他の差別的觀念を起し自分と他人とを比較する。従つて、競争心を起すのである。絶對智の所有者、即、大我に生きる人は、一切が吾であるから、他と比較しないのである)

『何でも持つて居る智識は悉く捨て、しまはねばいけない。そうすれば、其等は後に二倍にも三倍に

もなつて働いて来る。』

『相對（とは智識である）を離れて、絶對（とは智慧である）に生きねば、道の体得は出来ない』
『教師や、宗教家は、個人を、絶對と云ふ山の頂上に誘導して、其關係を結ぶのが仕事』と教へられた。

『天香さんは才ありすぎる』といふ言葉は、木下翁の体験より出たもので。翁は天香さんを非難する資格があるのである。

翁も、天香さんと等しく、才の人であつた。

翁はその才時代を『基督の福音と、社會主義の學說とが、其基礎を異にして居るもので、従つて其の運動の方法に於ても黑白相容れないものであることは、予も最初から考えて居た』

『予は基督教徒として『絶對』だの、『平等』だの言ふ言語を使用して來たが、其の實予は常に自分を神と相對の位地に置いて居た。

従て人と人との間の平等に就ても、相對的思想を基礎としての平等的經畫だから、若し其れが實行されたならば、實に恐ろしい不自由な暴虐になる。

自由、平等、博愛など云ふ標語に對して、常に我が思想の不徹底に惱んで來たのは、必竟、名利と云

ふ情慾を中心にして、相對的智識で鹽梅しやうとしたからだ』

と、告白してをるが。文中の『基督の福音』とは絶對智である。

『社會主義の學說』『相對的思想』『相對的智識』とは、人間の智識を指したもので、吾等の智識といふものは、翁の言の如く相對的智識に過ぎないのである。

『予は我が胸中の矛盾撞着、不徹底、支離滅裂を知覺して斷へず其の不安に苦んだが常に自ら欺いて強いて目前の繻縫に努めて居た』

『予が胸中の疑團も漸く擴大して、運動から歸つて獨り書齋に横たはつた予は宛然一個の屍骸であつた。予は此の精神的疲勞の我が姿に對して常に種々な疑問に打たれた』

『表面の理窟を修飾すればするだけ内部の生命は愈々益々支離滅裂して行く。乾坤一擲の手段に出る外はないがと日夜懊惱して居る最中、三十九年の五月六日母が死んだ。母の死に依て予は多年の暗き夢から醒めた』

『眞の立場を發見せねばならぬと云ふこと、是れが予に取て眼前唯一の生死問題となつた』

翁は智識に疑問をもち、深い精神的苦勞を経た後遂に智識の無力を覺つた。

翁は『原始へ返らねばならぬ』と思つた。原始とは絶對界である。

翁は、その師岡田先生に導かれて、絶対の世界に入り、自由を獲得した。

翁はこの境地を「一口に言へば、一切事物に對する我が態度の全然一變したことを自覺する。以前は火繩や蠟燭を振りかざして暗中の物を探ることに苦心したが、今はどうやら微白ながらも電灯が光つたような感じもする」と説明してをる。

翁は智識の皮を脱いで愚に還つた。「靜坐は馬鹿になる方法である」とは、翁の告白である。愚に還るとは、無爲界に入つたことだ。無爲とは、絶対である。

18、天香さんは、自然じゃないだらう。口開いたのだらう。

天香さんは大正八年十月、京都公會堂に於て天華香洞開扉式（道人には不相應な催であつた）を自ら開催して、世に出たのだ。

さんは『光』『懺悔の生活』發行等、凡、その自發的行爲を、自然的だと、辯護する。が、此處が、天香式トリックで、さんの常套手段である。

さんは宣傳がウマイ。現代は、宣傳時代であるが、宣傳とは、無いものを有るやうに見せる手品である。

19、天香さんは、社會的に廣つて行かれる。自然に流れるのはいい、琵琶湖の水が溢れるやうに。

天香教は社會的に擴つて行く。廣い、が、浅い。上滑である。

さんの如き布教方法は、多くの人に法縁を結ぶことはできるが、一個の人をも救ふことはできない。宗教とは、一人が救はれることである。

社會性を有つ教は、すべて、偽物である。眞理は苦いものであるから、大衆の口には入らない。ホントの事を言ふ者は、十字架に掛る。

人間は、すべて、自惚者である。自惚によつて生きてをる、のである。自惚者は、お世辭の白粉を好むものである。

ヤツは『なんぢら人に見せんために其義を人の前に行ことを慎め、もし然すば天に在す爾曹の父より報賞を得じ。』

是故にほどこしをなす時人のあがめを得んために會堂やちまたにて偽善者の如くラツバを己が前に吹しむる勿れ、我まことに爾曹に告ん、彼等は既にその報賞を得たり。

汝ほどこしをする時、右の手をなすことを左の手に知する勿れ、かくするは其ほどこしの隠れんが爲なり、然ば隠たるに見たまふ爾の父は明顯に報たまふべし。

汝祈る時に偽善者の如する勿れ、彼等は人に見られんが爲に、會堂やちまたの隅に立て祈ことを好、われ誠に爾曹に告ん、彼等は既にその報賞を得たり。

汝祈る時は、ひそかなる室に入り戸を閉てかくれたるに在す爾の父に祈れ、然ばかくれたるに見たまふ爾の父は明顯に報たまふべし』

と訓戒した。

一灯園同人が『六万行願』と稱して、隊伍をなして、所謂托鉢を行つてをることは、『人に見せん爲に其義を人の前に行ふこと』であり。『人に見られんが爲に、會堂、巷の隅に立て祈ることを好む』ことであつて。同人は偽善者である。彼等は、救はれざる存在である。

木下翁は、その三十一才の時『キリスト教徒として此一身を日本の國土に貢献したい』と念願。郷里より東京へ出て、社會運動に携はつた。

翁は、『基督の福音と、社會主義の學説との矛盾に悩んだが、常に自ら欺いて強いて目前の繻縫に努めて居た』

翁は『神の名に依り人道の名に依り救世済民の名に依りて活動しつゝある此の若き義人(翁を指す)は、實に名聞利達の情慾に驅られて行方定めずに漂浪する盲目の餓鬼に過ぎないことを見た』のである。

世人が拜んでをるのは、翁の社會的方面、即偽善者木下尙江である。

翁は、懊惱多年、遂に『原始へ返らねばならない』と思ひ、四十二歳靜坐に入つた。原始とは吾内界である。翁は、それより三十年間柴門深く掩ふてその生涯を送つた。

外より内へ、木下翁の歩んだ道は正道であつた。外へ外へ、天香さんの歩み方は、外道である。溢れるには、深く堀り下げねばならない。自己に徹底するには、孤獨とならねばならない。

20、天香さん、早過た。六十位になつて、圓熟してから言へば。

天香さんは、三十二歳の時、トルストイの『我宗教』を讀んで、靈覺といふ妄覺を得其後一末亡人を物質的に救つたところから、誇大妄想狂者となつてしまつた。

大正八年十月、天香宗の見世開を行つた。さんは當時四十八歳であつた。その宣傳書『光』は全十一月、『懺悔の生活』は、十年六月、世に出た。

さんは、兄弟の目にある物屑を視ることに忙しく、己が目にある梁木を見る暇がないから。六十を越しても(さんは今年六十八歳である)その思想は、圓熟所か、淺薄となり、従つてその生活は愈々社會的になつて行く。

一灯園宗は、畢竟、社會事業であり。さんは社會事業家である。社會的と未熟とは、關聯がある。未熟者ほど社會的となる。社會的となるから。ますます未熟者となるのである。

21、鑛山を掘ることは、臟腑を抉られるやうである。

田中正造翁の、日記（明治四十三年七月二日）には『天地は皆な我が身なる事を知るべし。山を掘り金を出して之を利とするは、我肉を賣て衣食に換ゆる類なり、我身なる天地を傷くるものなり』とある。

天香さんはその所謂新生涯の後も、秋田縣田の澤鑛山に關係して居つた。さんは山師である。

22、他の人まで引入れるのは不可。

天香さんは、『妻子を提げて路頭に立つ』

『女房も子供もこの生活に喚入れる』

『一燈園の生活は家庭ぐるみですべきである』

と説いて、その妻、子に、一灯園生活を強要して居るのである。その弟子にまで及ぼしてをる。

人間は、獨立の世界を有してをる。妻、子、弟子と雖も絶對の人格者である。

他人に強制することは、支配慾である。

他人の領域に侵入するどろばうである。

古今、東西の、英雄、豪傑、偉人等と、世人より敬稱されてをる人々は、皆、このどろばうである。その事業が大なれば、大なる程、その罪は深重である。世人が、所謂偉人に驚歎する心理は、その山のやうに積まれた贓品が、その目に附くからである。

どろばうを崇拜する世人も亦どろばうである。どろばうに成りたいから、どろばうを拜むのである。

木下翁も、その前半生は、このどろばうであつた。

『一度は天下を狙ひし悪黨も』（病中吟）と翁は告白して居る。翁は、靜坐によつて、この泥足を洗つたのだ。

どろばうは、貧乏人である。自分が貧しいから他へどろばうに出懸けるのである。どろばうは痴人である。わが内に尊いもの存在することを悟らないのである。

さんは、『吾は靈覺を得、再生した』と説いてをるが。自覺とは絶對界を体得することである。

個性の尊嚴に目覺めることである。

さんは口に『相敬』を説くが、その妻、子、弟子を奴隷扱してをるのである。他を奴隷視する者は、自分も、奴隷である。

天香さんの行り方は壓制的であり、妻、子、弟子の行き方は摸倣的であつて、等しく無自覺者である。一灯園生活が形式的で生命を持たないのは、當然である。

吾等は『我に従へ』と命令する覇者に服従してはならない。彼等に従ふならば、吾等は奴隷の憂目を見なければならぬ。

23、 田中正造翁は早く死んだ。

田中翁の早世（大正二年、七十三歳）を惜まれた。木下翁自らは六十九歳で逝かれた。

25、 僕、天理教へ行つた。

翁曰『予は遂に思ひ迷ふて大和の丹波市まで天理教を尋ねて行つた。予は天理教に深く感謝する。若し教祖の中山みき女が尙ほ生きて居つたならば、予は直に彼女の信者となつたに相違ない。山居一年

一ヶ月にして予はまた空しく山を下りた。『世上一切の罪惡は悉く我身の影だ』得た所のものは只だ此の一語』（野人語第三、靜坐。）

一切の罪惡は、わが影を追ふこと（是を妄想といふ）即、心外に求めるところより生ずるのだ。

27、 岡田さんは、世話されるか、御暇乞なされるかである。

先生は安逸は貪られない。それには理由があるのである。

29、 一燈園の奉仕には、高慢がある。奉仕、金を貰ふこと豫期しやしないか。

天香さんは無反省から慢心を生じ、慢心が聖者思想となり、聖者思想が『奉仕』の可能を信ぜしめ、遂に『奉仕』は園の信條となり、無知の同人が、これを摸倣してをる。是が、一燈園の現状である。天香さんはその親しい家へ行き、お釜の落しを食べ、家の仕事を手傳つて、女主人を感激せしめたところから、忽、慢心してしまつて、

『お釜の落しを食つて働き出した時に、『われ世に克てり』と云ふやうな感が致しました』他を凌がなくても、自分一人が生きうるばかりではなく、他が救はれて行くといふことは、何とした有難い事だ

あらう』

『私はもう大丈夫、歩むべき道は新に與へられた。此處でかうして貰ふのに止めず、彼方此方を貰つてゆかう、彼方此方で仕事をさせて貰はう。惱みは何處にもあるに違ひないと。斯うして私は幾年も托鉢し、到る處の用事をさせてもらつたのであります。』

『或坊さんに釋尊の托鉢といふのは、如何なことですかと聞きましたら一、通りの説明をしてくれた後に、註釋を付け加へて。或時お弟子が釋尊に對して、饑饉の年には托鉢をなさらぬがよろしからう、と申したら、釋迦は饑饉年には尙托鉢せねばならぬと、いはれたさうですが、自分は矢張り托鉢せぬのがよいやうな氣がしますと言はれました。私は腹の中で、この坊さんはお釋迦さまをととも知ることとは出来ない方と思ひました。今は私でさへ潰れる家へ貰ひに歩かねばならぬことを知つてゐます』(懺悔の生活、第四章、轉機)

と、自分は救済主と妄信。ヤソ、シヤカと同格視するまでに、増長してしまつた。

さんは『釋迦は、饑饉年には尙托鉢せねばならぬと言はれた』『今は、私でさへ潰れる家へ貰ひに歩かねばならぬことを知つてゐます。』と、釋迦を、自分を聖者視してをる。

『饑饉年には尙更托鉢せねばならぬ』『潰れる家へ貰ひに歩かねばならぬ』とは聖者的、高慢的態度

であり、『懺悔の爲に奉仕し』『願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し』(一燈園信條)とは凡夫的。懺悔的態度であつて、撞着である。

饑饉年には尙更托鉢せねばならぬ潰れる家へ貰ひに歩かねばならぬ程の聖者に、懺悔の要があるであらうか。

一燈園の信條『懺悔の爲に奉仕し』『願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し』は、矛盾である。懺悔と、奉仕とは、一つのものではなく、全然正反對のものである。

奉仕といふ觀念は増上慢の沙汰である。慾望の結晶である吾等凡夫に、奉仕徹底は、不可能である。吾身を深省するならば、吾には奉仕の資格がないことを觀得する。これを懺悔と言ふのである。

かやうにさんの一身中には、懺悔——佛と、奉仕——慢鬼とがその頭を擡げてをる。さんは兩頭の蛇であるさんの生活の矛盾はこゝより發生する。

一燈園同人は『金』は要らないと言ふが、『錢』は欲しいのだ。

天香さんは『一燈園の費用は供養された淨財』であると言ふ。淨財に生きたいと祈る事は許される、それは佛願であるからである。さんの様に、淨財に生きてをると、明言する事は冒瀆である、無反省なる聖者的思想である。地上には、淨財は存在しないのである。

一燈園同人は、托鉢と稱へて、便所掃除を行つてをるが。不淨場掃除は、わが汚心を洗ふのでなけれ

ば、無意義である。全人の便所掃除は救済、報恩奉仕といふ高慢的態度であるから、洗ふのではなく汚すのである。

木下翁曰『慢心の修業は、拭けば拭く程穢くなる』(尺牘)

昨年十一月、さんが、因縁のある土地からと、所謂六万行願(便所掃除)をその郷里より開始したのは、郷里を清掃したのではなく高慢の糞を捨て、郷土を尿だらけにしたのだ。

園同人は、肥壺へ這入つてをるのだ。悪臭、芬芳全く、鼻持がならない。同人自らは、無知の狐に騙されてをるから風呂へ入つた積で居るのだ。

奉仕、即、他の爲といふ吾から遊離した處に目標を置いての修行は、努むれば努むる程、ますます吾から遠ざかつて行つて徒勞に歸する。目的が利他であるから、自利にならない事は當然である。

是に反し、我修行といふ謙遜的態度を以てするならば、わが徳を積む事が出来る。

吾等は、『させて貰つたのだ。』貰つたから、自分の有になる、得する。奉仕報恩的態度は、『して遣つた』のだ、遣つたから、何も残らない、損する。

便所掃除は、わが垢を落す爲に、わが修行の道場に借用したのである。貸主に對し、此方から感謝しなければならぬのだ。

此處にも亦惡魔が潛む。吾等は利他——高慢の邪鬼を逐ふて、自利——我慾の惡魔を迎へる。前門の

虎口から逃れて、後門の狼の毒牙に掛る。危い、危い。

一燈園の標語である『光明祈願』の第三條には『懺悔の爲に奉仕し』の上句に續いて『報恩の爲に行乞せん』とある。奉仕と、報恩とは思想内容は一である。さんも『一燈園同人は懺悔報恩の奉仕者』であると言ひ。『若しも奉仕といはねばならぬなら懺悔報恩の四字を心掛けねばならぬ』と言つてをる。さんは『懺悔報恩』と言ふが、懺悔報恩は矛盾した言葉である。懺悔と、報恩とは雲泥の差がある。懺悔は佛道、報恩は魔道である。さんは『報恩の爲に行乞せん』『菩提心によりて行乞し』と言ふが報恩思想は菩提心ではない。

さんは『私等は先づ恵まれたちやによつて總て報恩するのであると極度の謙遜を持たねばならぬ』(懺悔の生活、第四章、轉機)と説いてをるが。報恩とは、謙遜ではなく、高慢である。木下翁は『乞食は慚愧と、感恩と具足せる菩薩行なり』(尺牘)と。『恩を感じる』——有難い。是でよいのだ。是が謙虚である。恩を感じる事が深きに從つて、わが人格は深まるのである。吾等は恩を感じる事が、深ければ深い程、報恩するには、わが無力を愧ぢるのである。

報恩を説く者の受けた恩恵は、吾力にて報じ得る程度の浅いものである。

報恩とは、恩を返すことだ。恩を受けても、返してしまつたら、吾内には恩恵は無くなるのである。

報恩を説く者は、受けた恩の万分の一にも足りない小善事を爲して、それが報恩だと自負してをるのである。高慢の爲にわが徳を失つてをることに氣附かない痴人である。

さんは『若しも奉仕といはねばならんなら懺悔報恩の四字を心掛けねばならぬ。私等は先づ恵まれたぢやによつて總て報恩するのであると極度の謙遜を持たねばならぬ』と教へてをるが、是は怪しいものである。

『恵まれた』とは感恩である、感じることに依つて、恵まれたこと、即、恩が分るのである。恵まれた者に、報恩を説き、謙遜を教へる要があるであらうか。恩を感じた者には、非報恩的の行爲はない故に、恩を感じた者には、報恩を説くのは要はない。恩を感じない者に、報恩を説いても徒勞である。要するに、報恩を説く事は徒事である。

報恩（と言はねばならぬならば）とは、感謝の意志表示である。感から謝が生じる、感が本だ。恩を感じることでできない者が、恩を報ずることができらうか。さんはこの本（感恩）を忘却して、その末（報恩）を説いてをるのである。さんの教は、感恩のない報恩である。

報恩を説く事は、物を貰はないのに御禮を申せと、教へてをるので。衷心より謝意が表せないのは當然である。

現代の教は、總て、是だ。さんは、時弊に陥つてをるので。

現代教育者は、『孝行』を高調してをる。けれども、事實はこの教を裏切つて、曾て、眞實の所謂孝行者が一人も出現しないで、不孝者が續出することは、何を物語るであらうか。

感恩の根本を放却して、孝行の末葉を説いてをるからだ。

奉仕、報恩、孝行を説く者は偽善者である。奉、報、孝の文字は人間の辭書より抹殺しなければならぬ。

偽善的行爲の基因は、指導者自身が、報恩、孝行を体験しないからである。吾等は先輩から恩の代りに虚言を受けた。吾等も亦、わが後輩に嘘を返してをる。偽善は、因果爲送りである。

吾等は、先づ、感恩を學ばねばならぬ。感恩を阻むものを退けねばならない。

『小我』が、感恩を妨げるのである。わが心中に小我がある爲に、素直に恩を領納することができないのである。

奉仕、報恩といふ高慢心を起させるものは、『小我』である。

奉仕とは、他の爲—利他的思想である。利他的思想は、自他の差別的觀念より生じる。自他の差別觀を起すものは『小我』である。故に、奉仕思想の本は『我』である。

如斯惡徳の正体は一つだ。「我」である。吾等が退治しなければならぬものは「我」だ。ヤソの『われ世に克てり』とは、この「我」を克服することである。

吾が智慧の光明に照される時、奉仕報恩といふ高慢の悪鬼は、吾身から退散する。是を懺悔といふのである。

奉仕といひ、報恩といふ、その内容は一つ、愛である。故に『今此三界は皆是れ我有なり、其中の衆生は實に是れ吾子なり』（法華經）の境地に到つて、初めて、奉仕、報恩は可能である。

どんな所謂親不孝な人でも、親となれば、報恩してをる。親は、その親より受けた大恩を、わが子に報じてをる。親は恩を報じても、報恩だとは思つて居ない。ホントの報恩とは是だ。親は、報恩を口にしないが、實行してをる。

地上の一切の行爲は、功利的である。その中にたつた一つ利害を超越した行がある、それは親の愛だ。人生に於て、子供を育てる事位、算盤に合はない仕事はないのである。

親は自分が食はないでも、わが子に食はせてをる。親の愛は、ホントの奉仕である。親は、黙つて奉仕をやつてをる。

この引合はぬ仕事をやつてくださる親があるから、子は育つのである、親の愛は絶対の愛であるから

有難いのだ。感恩が出来るのだ。奉仕、報恩といふやうな恩恵的な行爲から恩を感じることができら
であらうか、感恩のできない教は、教ではないのである。

親の眼中には子はない。親にとつて子は吾だ。親の愛は、無我の愛である。親にホントの奉仕、報恩
が可能なのは「我」がないからである。

天香さんの反對者は奉仕を不可能事として否定してをる。この否定思想は慾望の肯定より生じる。慾
望が、『奉仕はできない』と拒絶するのである。

天香さんの奉仕思想は、慾望の否定から出發してをる。さんは尿の穢い事に氣が附いてをる。さんは
その反對者より一步踏出してをる。さんの反對者は、糞の臭い事すら感じない。彼等は臭覺が麻痺し
てしまつてをる。

自分も、さんの反對者と同じく、奉仕を否定する。けれども、その内容に於ては根本的の差異がある。

反對者は、奉仕の不可能を當然事として愧ぢない。彼等には慚愧がない。彼等の態度は天香さんにも
増して高慢である。自分は、奉仕の不可能を愧ぢるのである。木下翁曰『大涅槃經に慚愧の二字を高
調す、慚愧の汗にこそ佛性の影は宿るらめ』（尺牘）

慾望を肯定するさんの反對者は惡魔である。慾望を否定するさんは聖者である。慚愧を懐く者は凡夫

である。

『曉烏敏氏は悪魔で、天香さんは聖者で、梅原眞隆氏は凡夫だ。』といふ批評があつたが自分は前二者評には肯けるが、梅原氏評には首肯できない。梅原氏の凡夫思想は、慚愧から出たものではない。彼氏は悪魔である。

釋迦は聖者ではない、凡夫である。凡夫といふ言葉は、易々と出るものではない、慚愧よりにじみ出るものである。釋迦が涅槃經中に於て、慚愧を高調したのは、その自戒である。木下翁曰『乞食は慚愧と、感恩と具足せる菩薩行なり』(尺牘) 釋迦の托鉢態度は、慚愧的であつたのである。『菩提心によりて行乞する』とは、是を言ふのである。

聖者とは、他人の尻の不潔に氣の附く人である。故に、他家の便所掃除に出懸ける。他家の便所掃除をするわが姿を省みやうとはしない。聖者の眼は外へ向けられる。

凡夫とは、わが尻の不潔に氣の附く人である。凡夫の眼は、わが内へ向く。

常人は、宗教とは、凡夫が聖者になることだと信じてをる。これは顛倒の謬見である。聖者が凡夫に還らねばならないのである。

天香さんは悪魔から聖者になつたが、凡夫に到達するには、大懺悔を要する。

後記

自分は、明治四十二年(二十三才の時)、神經衰弱症に罹つた。

あらゆる治法を試みたが、無効であつたので、翌々十四年上京、東都知名の醫師數名の門を潜つたが、それも徒勞で、病状はますます充進して行つたので、自分は絶望の餘、自殺を考へた。

我身体が彼様な窮迫状態にある時、醫師も信頼できない、物質的療法も用をなさない。自分は物的方法では救はれない、病因は我心にある、との聲が胸底で聞えた。

當時「實業之日本」誌上に、岡田虎二郎先生の教靜坐」の事が掲載された。

先生は救済主だと信じた。機縁が到来したのであらう

同年十月二十五日、先生の門に入った。

自分が、木下翁を知つたのは、入門の前日であつた

(先生は、容易に入門を許されず、自分は、參觀といふ名目で、幾日間か參坐した)當日、靜坐會散會後、翁は、某新聞記者に對し、

峰へ登らなければ、凡を見ることはできぬ。谷間より峰を見ることはできぬ。

(註、神の道は頂上から見下ろすのだ。うたてや、己が知慧に暗んだ我等人間は谷間を迂廻して、出ること知らない。翁者、野人語第三)

靜坐前の僕は、神經過敏で、驕傲であつたが、今は如何なる人でも尊敬する様になつた。

靜坐は、馬鹿になる方法だ。

世の中に恐怖、就中、病氣を恐れる程馬鹿はない事を悟つた。

(註、恐怖は無知の兒だ。野人語第三)

と語られたのを傍聴、翁に敬意を拂つた。

其後、翁の文章、静坐感想、日蓮論、法然と親鸞、野人語、創造等を讀んで、翁敬慕の念は深まつた。

入門後の自分は、先生の御教導に依り、心身共に、日に／＼變つた。

我内に別天地が開けた。肉體も正しいものとなつた。自分は救はれたのである。

静坐に入つて間のない時であつた。未だ神經質の自分は、酒害を痛感、母の反對を押切つて、祖先傳來の家業、酒舗を廢業する事に決意。

岡田先生の御意見を伺つた處、其不心得を諷され、我非を悟つた。

下記は、先生の御高話である。

酒、牛肉は贅澤品だと日本人は思つて居りますが、牛肉は西洋では乞食の食ふものです。

麴町教會の上村牧師の奥様の里は酒屋であつたが、

無理に止めてお仕舞なされ、今は食ふに困つて居られる。

君の店が止めたとて、脇の店へ買ひに行く。

不健康者は、酒や、煙草を飲まないといふと血が通はない益があるから飲むのです。

問、西郷南洲翁は、その身體が健康に向ふに従つて酒量が減じた、といふ事ですが。

答、健康體となれば、酒を飲む必要はない。

問、害があるならば、内より止めなくつちや駄目ですか。

答、その通り。

わが參坐は數年間續いたが、其後隋氣を生じ、先生の膝下より遠ざかつた。

更生後の自分は、從來の友人とは自然に離れて、孤獨となつた。

大正六年、雜誌「湖國」掲載の一文「創造と摸倣、杉本

鳩莊」に共鳴、全君と交るやうになつた。爾來同君とはその死に至るまで（同君は昭和八年、五十五才で亡つた）交遊を續けた。

同君は藝術的で、趣味の豊かな人物であつた。自分の藝術的方面（單に、自分のみの事に就て言ふのである）の眼を開けてくれたのは、同君であつた。

然、同君の宗教、思想に對する態度が消極的であつた事は、自分は慥たらなかつた。

大正七年八月、杉本君に誘はれて、曉烏敏氏を訪ねその教を聽聞するやうになつた。

我父は若死されたので、我母は、その獨子である自分を生育する爲に、その全精神を傾注せられたのであるが。

自分は母の期待に反して、病弱、怠惰、放蕩であつたが爲に、母の苦惱は絶ゆる間がなかつた。

斯様な自分も、静坐によつて健となり、大正四年結婚

翌五年長女が生まれたので。放心せられたのであらう、母は大正七年十二月、他界された。

母の死は、死期を得たものであつた事は、この不孝兒の、せめてもの慰めであつた。

母の死から衝撃を受けた自分は、翌八年一月、西田天香さんの教を受けるやうになつた。

自分は、曉烏、天香二氏より大なる思想的影響を受けたのであるが。

静坐より得たわが思想と、二氏の教旨との矛盾に、自分は多年悩んだが。わが自覺は、遂に二氏より離反するに到つた。

兩氏の今の様は如何であるか。前者は御用學者に迄成上り。後者は社會事業家とまで墮落してしまつたのである。

大正九年三月十八日、自分にとってはタツタ一人の女兒を疫痢で失つた。

396
237

愛がなかつたのである。

自分の心中は、一時に暗黒になつてしまつた。愛兒の死によつて、眠つて居つた我魂は搖起された。

橋本五作氏に御詫状を書いて貰つて、同年六月三十日上京。再び岡田先生の下に參坐した。

同日、西田天香さんの紹介状（前略、此青木吉藏さんは私の生地のツイ眼と鼻の間に育合し人に御坐候。曾て靜坐（岡田先生について）を學び、またト翁なども好きといふ人に御坐候二三年前より親敷知合、今では長濱では特別の知己といふ始末。常に御兩君（註、木下翁と逸見氏）の事を申居候もの故、改めて見參るとして照會状を頼まれ候。現在は商業は手控、種々公職（地方の世話）を頼まれてやつて居られ候次第にて候。

下略）

を持參して西ヶ原へ、木下翁に謁した。

本書六月三十日附語録は、此時の談話である。

全年八月三日、京都小林氏方にて、岡田先生に御指導をうけた。

其の時先生は、吾等に對し、名残を惜しまれた。先生は自分の死期を豫知して居られたのであることを、自分には後に到つて知つた。

十月十七日、先生急死、愕然とした。先生御在世中のわが怠惰を悔むだ。

二十三日入京、二十五日故先生宅に安置の御遺骨に禮拜、先生の鴻恩を感謝した。

全じ日、木下翁を訪ふた。十月二十五日附、語録は、この折の談話である。

師を失はれた翁は、言葉少であつた。

昭和十四年四月廿五日印刷 定價金三十錢
昭和十四年四月三十日發行 送料三錢

編輯兼 青木吉藏
發行所 滋賀縣坂田郡長濱町大字三ツ矢二〇六

印刷所 富士印刷合名會社
滋賀縣坂田郡長濱町八六

發行所 無義社 青木吉藏
滋賀縣長濱町
播磨京都壹五四九壹番

終

6
7